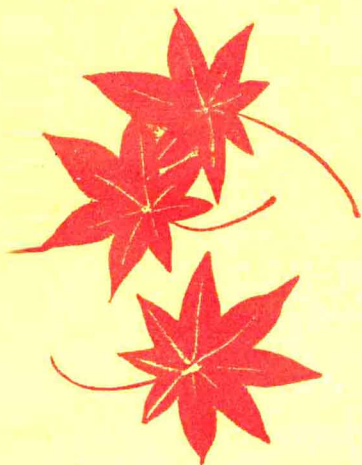


風 霜



尾
崎
士
郎



新
潮
社
版

霜 風

昭和二十九年三月二十一日 印刷
昭和二十九年三月二十五日 發行

定價 貳百七拾圓

地方 貳百八拾圓

著 者 尾 崎 士 郎

發行者 東京都新宿區矢來町七一
佐 藤 義 夫

印刷者 東京都文京區柳町二六
山 元 正 宜

發行所 東京都新宿區矢來町七一
株式會社 新 潮 社

電話九段(33)二一—五番
振替 東京八〇八番

(亂丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。)

印刷 三晃印刷株式會社 製本 京橋加藤製本所

Printed in Japan

風

霜

挿 装

絵 幀

鈴 江

木 崎

朱 孝

雀 坪

序 章

この小説は安政の大獄から端を発する。安政五年九月から十二月にかけて、全国にわたる倒幕論者は、思想と立場の如何にかかわらず、現状を打破する意見の持ちぬしというだけで一網打尽に、つぎつぎと江戸檻送を命ぜられた。その主動力は、時の大老井伊直弼であるが、井伊の嚴命を実行にうつした当面の責任者は、その前年、老中に任ぜられた間部下總守詮勝であった。

間部下總守の名は傲岸不屈をもって儕輩のあいだに鳴りひびいている。世に時めく井伊を背景とする間部下總の處理がいかに嚴烈を極めたかといふことはくわしく説明するまでもない。

彼はその年の九月十七日、井伊大老から上京（當時の上京は京都である）の命をうけるとすぐさま上洛し、宿營を市内の妙満寺に置いた。彼は朝廷の存在などを眼中においていなかった。夕方、京都につくと、翌朝、所司代、酒井忠義と町奉行、小笠原長常に命じて警吏の全動員を行い、市中に潜伏している改革論者を片っぱしから捕縛させた。外藩、親藩はもちろん地位の高下などは問題ではない。その範圍は、浪人だけではなく、藩士をはじめ、公卿、親王にまで及び、老幼男女の区別さえも意に介してはいなかった。

その中で、もっとも風あたりのつよいのは、水戸、尾張、長州、米沢、薩摩、長岡の諸藩で、個人個人について一応の取調べが終ると、一言半句の弁解もゆるされず、江戸送りとなり、すぐさま侯馬町の牢獄に監禁された。つづく安政六年に入つて、いよいよ搜索の手はきびしさを加えてくる。

長州藩の大目付、長井雅楽頭が幕府の了解を求めるために江戸へ下つたのは前年の秋もそろそろ終りにちかいころだったが、井伊と閥係のふかい長井は大体において罪の全藩に及ぶことを避けるための事前運動に成功したけれども、藩士吉田寅次郎（松陰）の断罪だけはまぬがれることができなかった。井伊は彼の面前で、何の理由もなしに流罪ときまつていた吉田の罪名の上に朱筆で、「流」の字を消して「死」と書き足した。今日の公文書の習慣では欄外に、「一字訂正」と書いて判を押すところであるが、一字は一字でも流罪と死罪とは大へんな相違である。

長井が帰藩したのは五月二十三日であるが、井伊との約を重んじた彼は当役と談合の上、翌二十四日の夜、――藩の刑務所である野山獄の獄司、福川犀之助に、二十五日未明を期して吉田寅次郎を江戸に檻送せよという嚴命を発した。

この四五日、降りつづいた雨は容易に晴れそうでもない。暗い獄室の中はしんとして、ときどき、唐人山から吹きおろす風が雨戸をがたがたとゆずぶる。大気は妙に重苦しく蒸しあつた。午前二時、――がちゃりと、獄室のそとから鍵の

鳴る音が聞えた。

にぶい灯かげが、ぼろっと獄室の壁にうつっている。

重い板戸が、ぎいっと鳴って、長い廊下を歩いてくる人の足音が聞えた。提灯のあかりが流れるように動いて、鍵なりになったいちばん奥の独房の前までくると、扉のカヌキをそこからはずし、一人の男が前かがみになって首を前につきだした。

「失礼いたします」

ぼそぼそと、かすれるような声である。「福川岸之助です」

「おり、——」

唸るような声がヤミの中からきこえた。すぐ内庭につづいている雨戸の上の樋がこわれているのであろう、断続的に雨だれの音が大きくひびく。

提灯のあかりが、がらんとした八畳の独房の中を照らしだした。

片隅に敷いてある、うすい煎餅蒲団の上から、よれよれの単衣を着た男がゆっくりと起きあがった。

もじもじとみだれた髪。痩せおとろえて、骨組だけが露わにうかんだ頬は、無精ひげでうずまっている。

「失礼いたします」

福川は独房の中へ入ると、すぐ内部から入口の板戸をしめた。

「福川君か、——いや、いつもながら御苦労じゃのう」

あぶら氣を失って、バサバサになっている髪を片手でかきあげた。憔悴しきった顔の中に窪んだ眼だけがらんと輝いている。その左の襟に、「吉川寅次郎」と書いたほそい布が縫いつけてあった。

「お身体は、いかがでございますか？」

「うん、——今夜は、ふしぎに咳も出ないようだ」

「それで」

と、勢いこんでいった言葉が、そのまま途中でとぎれた。

「何じゃ？」

「申上げます、藩命によって明朝、江戸護送と決定いたしました」

「そうか、——いや、御苦労」

寅次郎の肩がびりっとうごいた。「明朝というともう聞もあるまいな」

「そうです」

福川は、われ知らず息を呑んだ。「まだ時間がございます。今夜は今から御実家の方へお越しになり、親戚、門下の方々ともお別れの言葉を交わしていただきたく」

「ほう、そんな余裕があるのか？」

「はい、——万幸、福川の一存におまかせ下さいますよう」

やっと三十を過ぎたばかりの、福川のたくましい肩が、がくりと前にくずれた。横においた提灯の灯かげをかすめて、黒ずんだ壁の上を二びきのやもりが、のろのろと這っていった。

た。

藩命による重罪犯人、吉田寅次郎の護送について、獄司である福川が独断で家族をはじめ、門人一同との対面をゆるすということは尋常一様の決意によってできることではない。

もちろん、廿五日未明、——という藩政府のきめた出発時間、早くも萩の市中に横溢している青年帳輩の盲動をふせごうという、周到な用意のためであるが、しかし、それにしても、万一の事態が発生したら責任者である福川屋之助は切腹しなければなるまい。

それを押して、人の寝しすまゝた夜中に重罪犯人に手錠もかけず自宅に送り届けるという彼の好意は無言のうちに寅次郎の胸に沁みとおるのである。

「先生、——何卒、わたくしの無力をお咎め下さらぬように」
「何をいうか、松陰にはお礼の言葉もない、おれは、もう疾くの昔に覚悟をきめている、では、せつかくの御好意だ、——そろそろゆくか？」

上体を壁においた右手で支えながら、よろよろと立ちあがった。

「福川君、その机の上に日記の断稿が置いてある、これをあとでいいから入江（杉藏）に渡してやってくれぬか？」

「承知しました」

福川は、ちらっとうしろをふりかえった。

「都合によっては、入江君を私の部屋へ呼びだしても差支え

ございませんが」

門下の入江は、野山獄に隣接する岩崎獄に幽囚中の身の上である。

「いや、それには及ばぬ、このことのあるのは、去年から覚悟している、——今更、入江に会うにも及ぶまい」

いいかけて、急に気がついたように、

「貴公への、せめてものはなむけに、即興の詩をおくろう」
松陰は机の前へ、ひょいと身をかがめたと思うと、すぐびたりと坐った。筆をとって反古紙の裏へ右肩のあがつた字ですらすらと書きだした。福川がうしろから及び腰になって提灯のあかりをさしつける。

「満大梅雨霸城曉 千里單身上檻輿」

千里單身、檻輿にのぼる、——と、松陰は低い声で微吟しながらしばらく考えこんでいる様子だったが、あとの転結がつづかないらしく、

「これだけにしておこう、——江戸へのぼって、幸いに多少の命脈をたもつことができたなら、あとは何かの便に托しておくことにしよう」

「ありがとうございます」

福川が、うやりやしく詩稿をうけとると、

「さア、ゆくか」

そのまま犀之助をうながすようにして廊下のそとへ出た。雨は小やみになって風の音が急に底鳴りを加えてきた。二

人は長い廊下をわたって、二重になっている外廊下の扉の前まできた。福川が扉を押すと、入口の方に提灯をもって立っている二、三人の獄卒のすがたが、ちらちらとうごいている。

福川の顔はくすんだように萎びていた。彼は獄司であるとともに松下村塾における松陰の門下生でもある。すくなくとも福川は門下生をもって、みづから任じていた。しかし、福川がいかに松陰のために便宜をはかろうとしたところで彼の権限は高が知れている。

それを抑しきって藩政府の許可なしに、家族や門弟たちと別れのひとときを過ぎさせようというのである。

「貴公には、ひと方ならぬお世話になった」

松陰が淋しそりな微笑をうかべて、軽く福川の肩をたたいた。「これ以上望むところは、何一つない——今となって貴公の恩義に酬ゆることは出来そうにもないが」

言葉がとぎれて長い溜息になった。

「何をそのような」

福川は故意に素知らぬ顔で入口に立っている獄卒の方を向いた。

「こら、急いで駕籠を裏門に廻せ……」

福川の声には、するどい響きがかもっている。

「先生、どうぞ」

といって先きに立ち、獄舎と塀のあいだにある狭い通路へ松陰と肩をならべて入っていった。今度の江戸送りは松陰に

とって最悪の日のきたことを意味するものである。

福川は何か言おうとしたが、胸が押しつまって言葉が出なかった。裏門の前にはもう表から廻ったさっきの駕籠が待っている。松陰が乗ると駕籠はすぐうごきだした。福川の好意で、顔とすれすれの高さにある小さい窓が半びらきになっているので、森にかこまれた萩の町が、繁みの中に点々と燈火をつらねてぼろりと眼下にひろがっている。松陰は夢見るような思いで窓に顔を押しつけた。

坂を下ると、川にそった稚の並木道に出る。雨にぬれた民家の灯が眠りの足らぬ眼ににじみ入るようである。

降りつづく雨で、阿武川の流れは急に水勢を増したらしい。無気味な音が耳にへばりついてきた。並木道のときれたところに番小屋がある。

番小屋の戸はしめ切っているが、戸のすき間からにぶい灯かげが、たよりなく路上にゆれている。福川はその前までゆくと、駕籠を先きにやりすごし、雨戸を、そこから軽くたたいた。

「野山獄、獄司、福川犀之助——松下村へまかり通る」

言いすてたまま、駕籠を追って急ぎ足に歩きだしたとき黒い影が闇の中を流れるようにちかづいてきた。

「誰れか？」

福川が太い声で呼びかけながら立ちどまった。

「おう、福川君」

闇の中で、二つの眼がするどく、ぎろりと光った。

「みんな待ちこがれている、——どうなったと思つて様子を
見に來たところだ」

傘もささず、全身雨にぬれて立っているのは久坂玄瑞であ
る。

福川は左手をひろげて、虚空をおさえるような恰好をして
みせた。「おしずかに、万事、拙者が心得ている」

「うん」

と、重々しくうなずいてから、久坂は福川の肩とすれすれ
に、ぐっと上体をかたむけた。「せめて、あと一日、貴公のは
からいでもうにかならぬか？」

「いや、それは」

福川の顔に困惑の色のうかびあがるのを横眼でじつと睨ん
で、

「あとはおれがひきうける、藩公のゆるしがあればよからう」
せかせかと、はずみのついた調子で久坂が言った。

「そんな無茶な」

福川の肩がけわしくつりあがる。「明朝未明に出立せよと
いう国相府からの嚴命を、僕の一存で勝手な取りはからいを
しているのですぞ」

「それは、わかっている、——しかし今度のことだけは何と
しても台点がゆかぬ、どうせ江戸檻送ときまった上からは、
一日二日をあらそうにも及ぶまい」

「いや、それも」

福川がとぎれがちな声でいった。「時と場合によつてはわ
れ等の一命を投げだすほどのことは物の数でもないが、松陰
先生御一家の上に意外な御迷惑がかかることは必定ですぞ、
久坂君——僕の立場も考えていただきたい、福川犀之助は門
下生の一人として申上げるのだ」

「貴公の胸中を疑うのではない、何しろ事が急激すぎるので、
みんないきり立っているのだ」

「それもよくわかっています、久坂君、一切を松陰先生にお
まかせしたらどうです、もし先生に特別のお考えでもあつた
ら福川はいつなんどきでも」

「うん」

長い溜息を吐いたと思うと、久坂は矢嗟に福川の肩を両手
でおさえた。「貴公のいうとおりだ、おれたちが騒ぐのは一
時の鬱憤を晴らすことで終る、——とにかく行こう」
雨にぬれた若葉の色が夜眼にもいきいきと冴えかえってい
る。二人は泥濘の道を大殿に歩きだした。

右に折れた坂道をのぼると、松林が行手をふさいでいる。
雨は小やみになつたらしく、梢に鳴る風の音が急に烈しさを
加えてきた。

松林をぬけて、もう一つ坂をのぼろうとする高原の雑木林
の中からチラチラと灯かげが小さくうごいている。

杉家のうら門の扉がひらいたままになっている。

松陰が駕籠からおりと、福川は、

「先生」

といて丁寧に頭を下げた。「明朝、未明にお迎いにまいります、どうぞ、それまでごゆるりとおやすみ下さいませう」

「福川君、大へんなお世話になったのう、貴公の好意は死んでも忘れぬぞ」

「先生、どうか天運を信じて下さい、私は役目もございますから、ひと先ず野山獄へ帰ります」

「では、これでお別れか？」

「いいえ、明朝三田尻までお送りした上で、江戸からの迎いのものと交替する筈です」

「それはよかった」

松陰の瘦せた頬に佻しい微笑がうかんだ。福川は目礼すると駕籠をかついできた二人の獄卒をうながして消えるように松林の中を引っかえしていった。

入れちがいに杉家の人たちが、どやどやと門外へ出てきた。

福川の計らいで、門弟一同は裏手にある杉家の離室にあつまっている。黒い人影が煤けた障子の上に入りみだれた。

五、六人の青年が六疊の部屋で膝をすり合すようにして坐っている。その夜、国相府当職、益田弾正から一応の事情をきいて帰ってきた吉田稔麿が、勤皇列藩に対する幕府の態度

の強化したことを報告すると、末座にいてあつまった連中に番茶をついで廻っていた最年少者の品川彌二郎が、つややかな頬を紅潮させながら前へ進み出てきた。

「先生は何の罪名で江戸へ送られるのですか？」

「それが、長井雅楽からつたえられたところによると、倒幕の陰謀に加担したということになっているそうだが、何かおそろしく井伊の心証を書っているらしい」

吉田稔麿が不安そうに眉をうごかした。

「それならば、先生はすでに藩庁の裁きをうけて獄に下っていられるではないですか、長州藩士である先生を幕府がどうして処罰するのです？」

「藩の重役どもが後難をおそれて、何事も幕府の意見といえど大老の鼻息をうかがうことに汲々としているからだ」

どこかで、もう一杯やってきたらしい、前原一誠が吠えるような声で叫んだ。

そこへ、廊下を踏む足音が聞え、建付けのわるい障子が、がたがたとうごいて、蒼ざめた久坂の顔がぬっとあらわれた。

「おい、しずかにせい、――先生はもうお着きになったぞ」すると、前原が膝においた握りこぶしをわなわなとふるわせながら、

「それで、いつ御出立になるのか？」

「明朝未明ときいている」

「明朝といえば、もうすぐではないか、われわれ村塾の門弟

が、何の爲すところもなくこれを黙って見過ごしていいものか、久坂君、——僕は先ず君の意見を聴きたい」

「うん、それについて」

久坂は苦しそりに眼をしぼたきながら壁際の席に坐つた。

「おれは直接、藩公の意見を伺うつもりだったが、たつたいま、先生のお言葉をきいて思いとまった、先生からも一同囁りをしずめるようにと繰返し御注意があった」

「久坂君」

前原が左においた刀をつかんで、片膝を立てた。「去年、先生入獄のとき周布政之助は、吉田寅次郎の一身はおれがひきうけたと、われ等の前で公言したではないか、その周布が、藩政に関与する身でありながら、一言半句もわれわれに挨拶することもなく、先生の身柄を幕府の手に渡すという法があるか、——とにかく、今から行ってくる」

「どこへゆくのだ？」

「周布の屋敷だ、いや、諸兄にはいささかの迷惑もかけぬ、一切の責任はおれが負う、おれは今まで周布だけは、われ等の味方だと思っていたのだ」

「待て、周布を斬つたところで藩庁の意見をくつがえすわけにはゆかぬ、先生は、何も彼も御承知でいられる、悲しいのは貴公だけではない」

「しかし、今度のやり方だけは、どう考えても納得がゆかぬ、

先生を江戸へ送るなら送るのもよい、何の取調べもなく罪人として送るといふ法があるか」

「前原、——坐れよ」

久坂が落ちついた声でいった。

「短い時間を先生は、われらのために別れの言葉をとり交わそうとしていられるのだ、一時の感情に走って先生の志をないがしろにするときではないぞ、せめて今夜だけは楽しく過ごしたいといつていられる先生の気持をお察するがいい」

前原が不承不承に元の席に腰をおろすと一座は急にしいんとなった。部屋の間々から、かすかな溜息がもれ、軒をつたう雨だれの音だけが切なく、むせび泣くようなひびきをつたえる。

吉田稔麿が、ひよいと席を立って廊下のそとへ出ていったと思うと、すぐ引つかえしてきた。

「先生がお見えになったぞ」

障子に黒い影がうつって、前かがみになった松陰の姿が幽鬼のようにうかがあがった。

「みんなあつまっているな、——雨の中を御苦労じやったのう」

正面の席へ坐ると、そのあとから、妹の芳子と寿子が酒徳利と、するめを大きな盆にのせて運んできた。

松陰は、一浴したあとの小ざっぱりした顔に明るい微笑を湛えている。——髪も結いなおしたらしく、鉄無地の着物に

黒紋付を羽織り、折目の正しい木綿の袴をはいている姿が、憔悴のあとを残してはいても、何となく若々しいかんじである。

彼は芳子の手から盃をうけると、かすかに唇をうるおしただけで、すぐ下においた。

「みんな、ゆっくりやるがいい、これでまた当分のおわかれじゃ」

盃がひとわり廻った頃、前原が息づまるような声で、

「先生」

といっぺん呼びかけた。「このたびのこと、藩庁の意嚮を解しかねます、先生の罪名について周布殿のお考えを聴いてみたいと存じますが、おゆるし下さいませうか？」

「いや、聴いたところでわかるまい」

「それならば」

前原の声が急にずい調子に変わった。「周布殿の一存にて、幕府に対し藩として、どのような処置を講ずることも出来る筈、それを何の理由もなく、先生の身柄を罪人として幕府に渡すなどとはもってのほかの仕儀と存じまするが」

「前原！」

松陰の瘦せた肩がびくっとうごいた。「今において慌てるにも及ぶまい、——人事をつくして天命を待つのみじゃ」

「では、長藩が幕府に屈伏するのを黙って眺めていてよいものでございませうか？」

「それも時勢の動きによる、貴公は一体何をしたいのか？」
「先生、長井は君側の奸です、正に斬るべき男です、私は長井を斬り周布を斬ることが藩論を生かす道だと思います」

「バカな」

吐きすてるような声だった。

「目前の感情に咬かされて一命を捨てたところで何になる、当世流の男になるなと、今まであれほど繰返していつているのがわからぬのか」

松陰の眼がキラリと光ると、前原はとたんに片手で顔をおさえた。悲しさがいっぺんにこみあげてきたらしい。じっと唇を噛みしめた。部屋の中はひっそりとして口をひらくものもなかった。

「今夜は楽しく酌もう、——死も大切だが生も大切だ、誰れかその障子をあげぬか、少し蒸すようじゃ」

和やかな微笑をうかべながら、松陰はうしろの柱にもたれかかった。

門人の数は続々とふえてくる。おくれてやってきた橋崎彌八郎が縁側に坐って、障子をあげた。庭の方で誰れか傘をさぼめるような気配がする。

橋崎は緊張した一座の空気にふれて、慄からず、ためらっている様子だったが、正面に坐っている松陰と視線が合ると、
「あの」

といっぺん口ごもった。

「遠慮はいらぬ、——橋崎君、遠いところを御苦労だったな」
松陰の、やつれはてた顔を見ると橋崎は急に胸がつまってきた。

「さいぜん、金子君の妹が来られて、ぜひともお目にかかりたいと申しておられますが」

「金子？」

松陰の顔が、かすかにうごいた。

「それは珍客じゃ、どうぞこちらへ」

橋崎は、もう一度両手をついてひれ伏してから庭の方をふりかえった。

「いや、何気なしに重輔のことを思い出していたところだ、

お妹さんは、たしか菊江さんといったな」

橋崎が障子ぎわにいざりよると、格子縹の単衣に黄色い帯をしめ、髪をひつつめに結った菊江が腰をかがめるようにして入ってきた。

「あの、——父がまいるところでございますが、病中にて歩行も満足にできません故」

「そんな心配はいらぬ」

松陰が慌てて遮った。「それどころか私こそ何一つお見舞のできないのを心苦しく思っていたところだ、せめて重輔の墓まいりをして別れを告げるつもりでいたが、それも思うようにはならぬ、どうかお父上にはよろしくおつたえ下され」
十八になる菊江の、下ぶくれのした顔には若々しさがみな

ぎっている。太い眉も、うすい唇も兄の重輔に生きうつしであつた。それが松陰の心にひとしお感慨をふかめたらしく、彼は何べんとなくひとりで首肯しながら、

「早いものじゃ、あれからもう六年になるのう、——重輔も若かったが私も若かった、あのときはまだ眼先にちらつくような気がするよ」

彼は急に語調をかえて、横にいた吉田稔麿の方をふりかえった。

「あのとき、もし重輔といっしょに下田からアメリカの軍艦に乗ることができたとしたら、おれの運命も変っていたかも知れぬ」

松陰は膝の前においてあつた色紙をとりあげると、筆をとって一気に何か書きあげたらしい。

「即興じゃ、これを金子の霊前に供えてやって下さい」それから、色紙を行燈の灯にすかすようにして低い声でよみあげた。「今更におどろくべしやからむとかねて待ちつるついで」

（終）の旅路を」

金子重輔は藩の軽卒であつたが少年の頃から松陰に師事していた。その金子をつれて外国行きを企てた彼は安政元年、正月、脱藩するとすぐにペルリの率ゆる軍艦のあとを追って神奈川から横浜に入りそこに待機していた佐久間象山と会って、いろいろ工夫を凝らしたが、幕府の監視がきびしいために機会を逸し、時の来るのを待っているうちにペルリの艦隊

が神奈川から伊豆の下田へ移ったときいてそのあとを追って下田へ駆けつけ柿崎海岸の弁天神社の中にひそんで、夜の更けるのを待ち、漁船を盗んでやっとアメリカ軍艦にちかづき海外渡航の志を訴えたが、彼等の必死の嘆願も無下に斥けられて、翌日縛につき、江戸送りとなったのが同じ年の四月十五日だった。

「どうか、重輔の霊におつたえ下され、松陰はいつも重輔といっしょにいる、人の世がいかに儚なくとも、道をつらぬこゝろとするものにとつては、一日は百年にひとしい、こんどのは重輔もきつと喜んでくれるであらう、——いや、考えてみれば長すぎる一生であつたよ」

みんな頭を垂れたまま口をひらくものもなかった。時間はおそろしい速さで過ぎてゆく。

雨気にとざされた空の一角にぼっと明るみがさしてきた。

「おう、一番鶏がないているな」

松陰がわれにかえつたように坐りなおした。

そこへ、妹の寿子が縁側の外から顔子をあげた。「あの唯今、福川様がお見えになりました、そろそろお支度をして下さいますようにとのお言葉でございます」

「そうか、——どうせ立つならば夜のあけぬうちがいい、すぐ出かけるのとつたえてくれ」

松陰は、

「では」

といって、門弟たちの顔をひとわたり見廻した。「どうか諸君、健康に気をつけていただきたい、寅次郎も君たちのことを忘れることはあるまい、——今日の悲しさがいつ喜びに変わるかも知れぬ、一時の感情に激して事を誤ることのないように、いいか、みんな大切な身体だ」

—先生こそ—

前原一誠が、勢いこんで何か言おうとしたと思つと、急に、しゃくりあげるような声で泣きだした。

「八十郎（前原の幼名）心配するな、——松陰は天意によつて動いているのだ、さあ、みんなもう一度盃を廻すがいい」窓から吹きつける風に煽られて燈心の灯がゆらゆらとうごく。盃がひとわたり廻されると、久坂がそつと席を立つていった。

朝の影

雨がやんだせいか、つぎつぎに鶏の鳴き声が聞えてきた。門の前には旅支度をした福川岸之助が、合羽をひっかけ提灯を持って立っている。

「福川君か、御苦労だな」

久坂が低い声で呼びかけると、

「人の目につくと困る、——それから」

一命を賭してのはからいだけに、福川の声にはするどいひ

びきがあった。「あまり大勢でお見送りはなさらぬように」

「心得ておる」

「唯今も、国相府から催促があった、万が一政治局の役人の目にふれたりすると」

「心配するな、……先生からも貴君に迷惑のかからぬようにと重ねて注意があった」

福川は不安そうに眼をしばだきながら、

「門下の方々は隣家の柴垣の前で、それとなく別れを惜しんで下さるるように、——表門から出ることは見合せていただきたい」

「福川」

と、久坂はそつと彼の耳にささやいた。「貴公の好意は忘れぬぞ」

杉家の人たちは福川に遠慮して、一人も姿を見せなかった。野山獄を出てくるとき松陰の乗っていた駕籠はどこかへ運び去られたらしく、同じ場所には鉄前のついた、窓の外に網をかけた檻駕籠が据えてあった。

空には明るさが仄々と沁みついてはいたが、大地はまだふかい闇に掩われている。闇の中から、黒い影が一つちかづいて来たと思うと、吉田稔麿に支えられた松陰の姿がうかびあがった。

福川が軽く目礼して、扉をあけると松陰はだまって駕籠の中へぐったりと腰をおろした。駕籠かきが二人に警護の獄卒

が二人である。駕籠かきは山口と三田尻で交代することになっていた。

福川から再三の注意があったが、駕籠がうごきだすと、黒い人影が柴垣のあいだからとびだした。そのあとについて四、五人の男がもつれるように歩いてくる。人の顔はわからなかった。

福川が片手で制止する恰好をすると、人影はひよいと立ちどまったが、またすぐ駕籠に近づいてきた。

阿武川の橋にちかづくとき、さっきから、そこに待っていたらしく、二人の男が行手に立ちふさがった。

福川はその前へせかせかとちかづいていった。「駕籠に近づくことはならぬぞ！」

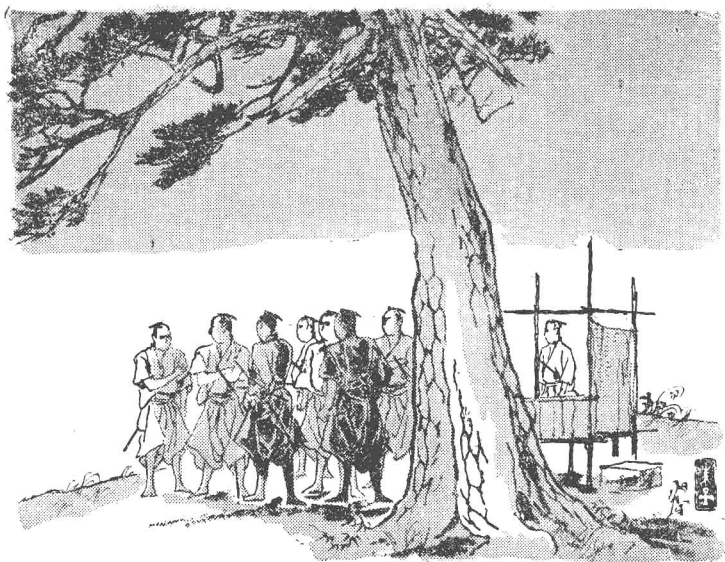
太い声で叫んでから、急に、低い、ささやくような声で、「城下をはなれたらどのようなにお取計らい申そう、此処で別れの言葉なぞは交わされぬように」

その声は渦を巻いて流れる阿武川の濁流に吞まれて、ほかの獄卒の耳には聞えなかった。

松陰を乗せた駕籠は、形式的にひと先ず野山獄へ帰り、そこから出発したという順序を踏むことになっている。

やっと番所を通りぬけたところで、福川は駕籠を先きへやりすこし、ひとかたまりになって、あとからついてくる門弟たちを待った。

「村塾の諸君、——大谷巖にてお待ち下さらぬか、あとは必



ず僕の一存で取計らう、それまで、どうか」

苦しそうな声である。すると、先きに立った前原一誠が、ぐっと肩をそびやかして進み出てきた。

「われ等は勝手に歩いているのだ、余計なことをぬかすな」

「いや、そうではない、貴公等のためにいつているのだ」

「何を、獄司の分際で」

さっきから鬱結した感情のやり場に困っている前原は、雨にぬれた片袖をたくしあげた。

「よせ、前原」

うしろにいた久坂が二人のあいだに身体を入れながら、

「福川君の好意を疑うな、——みんな苦しいのだ、さア、おれたちは別の道から大谷嶮へ行こう」

「前原君」

福川の声は怒りに震えている。

「僕の気持がわかってもらえないのか、今更、君たちを出しぬくなぞと、そんな」

「いや、わかつとる、わかつとる、福川君、どしどし先きへ行ってくれ」

福川の眼がガラリと光った。「前原君、君は僕を信じていないのか？」

「それは別の話だ、——僕は君を問題にしているんじゃない」
殺気をふくんだ前原の声には挑みかかるような結りがあった。彼は、むしろ此処で一波瀾を起すことによって藩政庁